

[総合的な学習の時間]

命を見つめ、食の大切さに気付く子どもを育てる支援のあり方

— アイガモ農法の実践から見えてきたこと —

志賀 美幸*

1 はじめに

私は、現在の勤務校で、アイガモ農法による米作りを2回経験した。1回目は2年前で、地域の米作り指導者からアイガモ農法を勧められて取り組むことにした。この学校では初めての取組であり、教師も児童も手探りの中での稲作となった。しかし、地域の指導者や児童の意欲により、無事に無農薬コシヒカリを収穫することができた。この年の総合的な学習の時間のねらいの一つに、自分たちが育てた食材で一泊三食のキャンプに出かけ、食物を作ることの大変さや食物の大切さを学ぶということがあった。そのため、活動終了後は、アイガモの肉をキャンプで食べることにした。食べることを決定するまでには、何度も児童の間で話し合いをもち、最終的に結論を出した。自分たちが育てたアイガモを食べるという経験をした児童の心境は様々であった。

そして、本年、2回目のアイガモ農法での米作りとなった。前回との違いは、児童がいろいろな農法を調べ、それぞれの長所と短所を知った上で選択したことである。本年は、前回のアイガモ農法での課題をもとに活動を組み立てていくことにした。その課題とは、次の3点である。

(1) アイガモ農法の最後に、アイガモをどうするのかということが大きな活動上の問題となる。2年前は、アイガモを食べたが、家畜の大切な命を食べるという貴重な経験を軽々しくとらえてほしくはなかった。しかし、児童によって、食べた後の思いに差があった。中には「おいしかった。」だけで終わった児童もいた。本間(2004)¹⁾は、家畜の豚を育てる活動を通して、「(家畜の豚を食べるか食べないかの)話し合いの前段階で、児童の一人一人の生命観を構築する必要性」を述べている。2年前の実践では、話し合いをする以前に、アイガモとのかかわりに深淺の差があったように感じた。本年は、アイガモや田んぼへのかかわりに個人差を生じさせない支援の必要性を感じた。

(2) 本間実践では、児童が話し合いのもとに出した結論とは別に、反対の声があがり、豚を自分たちで食べることはできなかった。当校の保護者の中にも様々な意見があったに違いない。文化祭で一部の保護者の声を集めることはできたが、実際にアイガモの肉を口にした児童の保護者が、どんな思いを抱いていたのか知る機会を得ないままに終わってしまった。地域の願いを取り入れた活動とするためにも、保護者のいろいろな意見を集め、活動の振り返りや評価に生かす必要があったと考える。

(3) アイガモ農法は、非常に手がかかる。毎日の餌遣りはもちろんのこと、アイガモが逃げないように田んぼの周りをネットで囲ったり、田んぼの隅には雨除けの小屋を建てたりする必要がある。成長してきて羽ばたくようになると、ネットから脱走したアイガモの捕獲に追われることもある。2年前の実践では、毎日の餌遣りは児童の当番にした。環境整備はほとんど地域の指導者と職員で行った。そのため、作業の負担が大きく、また、児童はアイガモ農法の苦労をアイガモの世話を通してしか知ることができなかった。児童ができることとできないことがあるが、大人が行う作業を見ておくのと見ておかないのでは、アイガモ農法への認識が異なるだろう。アイガモ農法の大変さを知った上で、初めて農家の実状を知ることができる。そのためにも、児童の知らないところで地域の指導者や職員だけで作業を行うべきではなかったと感じた。

これらの課題を踏まえ、「アイガモ農法を通じて命を見つめ、食の大切さに気付く子ども」を育てるための、有効な支援のあり方を考えることを本研究の目的とした。

2 研究の内容

(1) アイガモ農法を始めるにあたっての各自の意識の明確化

アイガモを通して命や食を見つめていくためには、アイガモ農法での稲作に一人一人が積極的にかかわれるようにする必要がある。そのため、まず米作りにはどんな農法があって、それぞれにはどんな長所や短所があるのかを明ら

*十日町市立田沢小学校

かにした上で、最終的に自分が取り組みたい農法を決めさせたいと考えた。アイガモ農法をやりたい児童とそうでない児童のそれぞれの考えや理由を明確にしておくことで、その後の変容を児童自らが振り返ったり、教師が見とったりすることができるからである。そして、ねらいに迫るために、各自への支援の手立てを考える参考にしていく。

また、農法を決めた後も、様々な場面で理由を明確にしながら自分ならどうしたいのかという自分の立場を明らかにさせていきたい。自分の立場を明らかにすることによって、各自が人ごとではなく自分のこととして問題をとらえていけるものとする。

(2) 地域の指導者や保護者との連携

2度目のアイガモ農法とはいえ、活動を展開していく中で分からないことがたくさん出てくる。また、稲の生育を見ながらアイガモを田んぼに放す時期や田んぼから上げる時期を検討していくには、稲の生育状況を見極める確かな経験が必要である。児童に本物の体験をさせ、時期を逸したりすることなく稲作を成功させるためにも、専門的な立場からの指導者が不可欠である。このような指導者を児童の生まれ育った地域から見付け出し、地域に合った方法で稲を育てたり、指導者と触れ合いながらともに米作りをしたりすることにより、児童の学びは豊かなものになるのではないかと考える。また、保護者からアイガモ農法の援助をしてもらうことにより、児童は自分が直接かかわることができないような力仕事をより身近に感じて見学することができる。作業の内容や行ってみたいの感想などを、直接保護者を通して知ることができる。保護者も児童が行っているアイガモ農法や稲作を身近に感じることができる。保護者は、児童と一緒に取り組んだ教育活動については、思いや評価が変わってくるのではないかと考える。また、保護者の支援があれば、作業の負担を軽減することにもつながる。活動に際しては、活動のねらいや教師の思いを理解してもらい、効果的に児童とかがわってもらえるようにする。そして、地域の指導者や保護者の支援を活動に組み込み、どのような成果が見られるのかをみとっていく。(地域の指導者や保護者の支援があった活動には、次のような記述を入れる。

地域の指導者の支援 保護者の支援)

3 活動の実際 (平成17年度 第5学年 児童数48名)

(1) 農法を決めるまで 地域の指導者の支援 保護者の支援

2年前の5年生の実践を知っている児童は、社会科の学習でアイガモ農法のことを学ぶと、自分たちもアイガモ農法で米作りをやりたいという思いが高まっていった。児童の意識がアイガモ農法の良いところだけに向いていたことから、いろいろな農法があることを知り、それぞれの長所、短所を知った上で、最終的に自分たちが行う農法を決定してほしいと考え、農法や米の品種を調べる活動から始めた。その結果、農法はアイガモ農法と低農薬栽培の2つに絞られた。ここで、地域の指導者に農家の視点から、この2つの農法について話をしてもらった。この話を聞いて、アイガモ農法への支持を取り消す児童が現れた。その理由は次のようなものである。

農薬をできるだけ使わない普通の農法でやりたい理由

- ・アイガモ農法の方が、米のとれる量が少なくなると聞いたから。
- ・冬を越すのは大変とK先生(指導者)が言っていたから。
- ・今の中学1年生の人はアイガモを食べたと言っていて、アイガモの命のことを考えると、普通の栽培の方がいい。
- ・周りの田んぼが消毒をしているのに、うちの学校の田んぼだけしないと病気になってしまい広がるから。迷惑がかかるから。

このような意見は、実際に農家の視点からの話を聞いて、考えを変えた児童のものである。しかし、アイガモ農法を支持する児童の意見も強くなっていった。

アイガモ農法でやりたい理由

- ・アイガモを世話するのは大変だけど、農薬を使わないからおいしい米ができると思う。
- ・家で農薬を使って米を作っているのだから、違う方法もやってみたいなあと思ったから。
- ・アイガモを世話するのは大変だとわかったけれど、それだけがんばればおいしい米が作れそうだから。

この日は、各自家に帰ってから家族の意見も参考にしながら自分の考えをまとめていくことにした。この地域の児童は、米作りをやっている家が多く、それもコシヒカリがほとんどである。普段からおいしい米を口にしている児童は、「農薬を使ってもこんなにおいしい米なのだから、無農薬で作ったアイガモ米は、どんなにおいしいものなのだろうか。」という思いがあったようだ。この思いに普通の農法を支持していた児童も影響を受けた。そして、アイガモ農法で米作りを行うことに決まった。

(2) 田植え 地域の指導者の支援

待ちに待った田植えの日。田んぼに出る前に、地域の指導者に米作りのことやアイガモ農法のこと、田植えの作業のことなどを話してもらった。どの児童も「30年も米作りをしている」という指導者の経験を交えた話を真剣に聞き、熱心に記録していた。その後、田んぼに出て田植えを行った。米作りを行っている家の児童も、手で植える経験はしたことのない児童がほとんどであった。指導者に教えてもらったことを思い出しながら丁寧に植えている児童が多

かった。

資料1 (田植え後のシートから)

田植えはうまくできました。お米のこともI先生(指導者)に聞いたので、勉強になりました。稲は、4本くらいで持つといいなどと教えてくれたので、そうしてみようと思いました。田植えをやってみて、泥や田んぼの中の石に足をとられて転びそうになって大変だと思いました。でも、教えてもらった「抜き足、差し足」でなんとか転ばずに歩きました。十字になっているところに植えるのも、ちゃんと植える作戦でいいと思いました。(Y男)



写真1 (指導者に田植えを教わる)

(3) アイガモを迎える準備 地域の指導者の支援 保護者の支援

アイガモが来る前に、田んぼをネットで囲ったり小屋を建てたりする作業を行った。これらは児童の手だけでは無理なため、保護者にもおたよりで応援を呼びかけた。平日にもかかわらず、4人の保護者が手伝いに来てくれた。児童は道具の運搬を担当し、あとは大人の作業を見学することにした。

アイガモの毎日の世話は、3人ずつの当番制で行うことにした。16日に1回当番が回ってくる。土日も平日と同じように当番を当てた。そして、当番の児童には、その日の田んぼやアイガモの様子を記録しておく「田んぼ日記」を書かせた。その田んぼ日記を当番の児童に回していった。それにより、田んぼやアイガモの様子の変化が5年生全体に伝わるようにした。児童は夏休み中も責任をもって当番活動を行い、田んぼ日記も自主的に学校の下足箱を利用して回していた。

(4) アイガモを田からあげる作業 地域の指導者の支援 保護者の支援

稲の穂が出る前にアイガモを田んぼから引き上げなければならない。そして、田から上げたアイガモを学校敷地内の池で飼うため、池の周りをネットで囲う作業も行った。夏休み中であったが、この時は10人程の保護者が手伝いに来てくれた。

(5) アイガモの羽を切る 地域の指導者の支援

アイガモが大きく成長してくると、羽ばたいてネットを飛び越えることがあった。そこで、アイガモの羽を切ることにした。地域の指導者の中に獣医の経験がある人がおり、その人が羽を切ってくれた。

(6) アイガモの行末の話し合い 保護者の支援

① 第1時 <一人一人の思いを交換し合う>

9月に入ってから、役割を終えたアイガモのこれからについて話し合った。2年前にアイガモを食べたことを知っている児童なので、これまでも「アイガモって最後は食べちゃうんでしょ。」と聞いてくることがあった。また、地域の指導者の話からも、アイガモ農法が終わると、アイガモも食料の一つとして食べる場合があることを聞いていた。「自分もアイガモを食べてみたい。」という声も、「食べるなんて絶対に嫌だ。」という声も聞かれていた。そんな中、今年はこの年のやり方として話し合いによって結論を出すことにしたのだが、やはり議論の焦点は「食べるか、食べないか」に集中した。

アイガモを食べる理由

- ・普段も牛や豚の肉を食べているのだから、アイガモだって食べられるはずだ。
- ・アイガモを一生懸命育てたから食べないのではなくて、一生懸命育てたからこそ食べたい。アイガモを人に譲って食べられてしまうならば、育てた自分たちで食べてあげたい。その時は「稲を育ててくれてありがとう」という気持ちで食べたい。
- ・自分がアイガモだったら、寿命で死ぬより育ててくれた人の恩返しになって死ぬ方がいい。

アイガモを食べない理由

- ・給食やご飯で食べている牛や豚とは違って、自分たちでこれまで大切に育ててきたアイガモなのだから、食べることもなんてできない。
- ・稲作のために来てくれたアイガモで、食べるために連れてきたのではない。
- ・アイガモは食べられることでもう1回役に立つことができるという意見もあるが、子どもをませせたりもう一度アイガモ農法をやったりして、アイガモを長生きさせて役に立てる方法もあると思う。
- ・アイガモだって私たちと同じで死ぬまで精一杯生きたいと思っているのではないかと思うから。

資料2 (話し合い後のシートから)

私は食べたくないと思います。アイガモだって生き物です！お母さんから生まれてここまで育ったのです。食べるわけには、いきません。そう簡単に殺せるわけがないじゃないですか。私たちだって寿命で死ぬか、交通事故とか何があるかわかりませんが、アイガモだって人間と同じようにさせてもいいじゃないですか！(N子)

ほくは、アイガモを食べたいです。前の卒業生もアイガモ農法でアイガモを育て、食べていました。Wさんのお兄さんも「うまい」と言っていたそうです。それを聞いて、食べる方に決めました。(T男)

ぼくは、アイガモを食べたくありません。ぼくのおねえちゃんは、アイガモを食べました。おいしくなかったと言っていました。でも、ぼくは、おいしくてもおいしくなくても食べたくありません。(H男)

第1時を終えて… アイガモを食べる派 16人 食べない派 32人

② 第2時〈アイガモをどのように生かすか〉

第1時の話し合いでは、アイガモを食べたくないという立場の児童が多かった。そこで、アイガモを食べないとしたら、アイガモをどうしていったらいいのかということについて意見を出し合った。児童から出てきた意見は次のようなものであった。

アイガモを食べないとしたらどうするか

- ・学校で飼い続ける。
- ・飼ってくれる人を探す。
- ・アイガモ農法を行っている農家の人に譲って、来年使ってもらう。

アイガモに長生きしてほしいと願う児童は、この先もアイガモを飼い続けていけないか、もし自分たちで飼えなくても他に育ててくれる人に譲ればいいのかと主張した。しかし、譲った人によっては食べてしまう人もいるかもしれない、それならばやはり自分たちで食べるべきだという意見も出た。第2時の話し合いを終えて、本当にアイガモを長生きさせるためには、学校で飼い続けるしか方法はないかかもしれないと思いついた児童がたくさんいた。また、学校で飼うにあたり、冬越しはどのようにさせたらいいのか、冬越しは本当に大変なのだろうかという新たな疑問を抱いた児童もいた。

資料3 (話し合い後のシートから)

最初は、引き取ってもらった方がいいと思いました。でも、だんだん学校で飼う方がいいと思ってきました。でも、冬越しができるのかなと心配になってきました。だから、冬越しの方法を調べて、無理だったら引き取ってもらった方がいいと思います。(M子)

私は、やっぱりアイガモは食べたいです。もし、他の人にあげて、食べられたら嫌だからです。でも、もし食べないのだったら冬越しする方法を考えてピロティーなどで飼えばいいと思います。…でも、それだったらやっぱり食べた方がいいです。(S子)

冬越しの方法を調べようとした児童が何人かいたが、どの子も本やインターネットなどから情報を得ることができなかった。そこで、教師がアイガモ農法を行っている農家の人に聞きに行くことにした。すると、アイガモ農法を行う場合、冬越しさせることはほとんどなく、産卵させるもの以外は冬に食べてしまうことがわかった。アイガモは1年サイクルで利用されるのだ。だから、農家でもアイガモの冬越しの方法はわからなかった。その後、偶然にもアイガモを飼い続けている人を見つけた。伺ったところ、アイガモは冬の寒さに強く、池で冬越しすることができ、たらい程度の水があれば室内でも飼えるということがわかった。しかし、雪深い地域にある学校の環境を考えると、冬越しをさせることは相当の努力が必要であることを改めて認識した。どう結論を出すべきか教師も非常に悩んだ。2人の担任で毎日のように情報を集め、話し合った。そして、保護者はアイガモを通して児童にどんなことを学んでほしいか、どのような姿を児童に望むのか、保護者の考えを集めることにした。学習参観日に合わせて第3時の話し合いをもち、そこで児童に紹介できるように児童に向けて保護者の考えを書いてもらった。

資料4 (保護者の意見)

みなさんは、稲を育てるためにどんな方法がいいかを考えた結果、アイガモを使った無農薬栽培をやろうと決めたのですよね。みんなの稲を育てるため、アイガモは協力してくれたのだということを忘れないでほしいと思います。春から秋まで一緒にいてくれたアイガモはみなさんの仲間なのではないかと思っています。(Aさん)

アイガモを身近に見て、いろいろと観察したりして慣れ親しんできたことと思います。役目を終えたアイガモは、食べてしまう場合もあるということを知り、考えこんでしまうのも当然のことと思います。でも、現実には私たちの身の回りの生き物(鶏・魚・豚・牛など)を「食べている」のです。人間も「食べ物」を食べなければ死んでしまいます。普段から好き嫌いをなくいろいろなものをきちんとたべてもらいたいです。(Mさん)

子どもたちにはうまく書けないので、連絡帳ですみません。2年前の5年生がアイガモを食べたとき、当時6年生だった長女がショックのため、一時期鶏肉を食べられなくなったことがありました。今はもう何となく食べられるようになりましたが、そのようなことがあったということも知っていただきたいと思いました。どうするべきなのか私も結論を出せませんが、今年の5年生がみんな話して、一番いい結論を出してくれることを願っています。(Tさん)

保護者の考えも様々であった。結果にかかわらず、食や命の大切さに気付くことができればいいのかという意見も多かった。ただ、Tさんの連絡帳を読み、2年前の影響が他の学年の児童にも及んでいたことを初めて知ることとなった。確かに、前庭の池にアイガモを引越しさせてからは、低学年を始め、たくさんの児童がアイガモを見に行ったり、可愛がったりしている。これら保護者の意見と、どうしても食べられないという児童の気持ちを考え、

アイガモは食べないという方向で決断することにした。第3時は食べないという結論を児童に伝え、食べない派の児童が納得できることと、食べる派の児童が食べることは悪いことではなく妥当な道であることを理解すること、また互いの立場の思いを理解することをねらいとして、時間を設定することにした。

第2時を終えて… アイガモを食べる派 16人 食べない派 32人

③ 第3時〈アイガモから命・食の大切を考える〉

新しく得た情報を児童に知らせ、保護者の考えも伝えた。アイガモ農法でのアイガモがほとんど食べられていることを知ると、食べない派の児童の表情は曇った。春には分からなかった、アイガモ農法への認識の甘さを感じる子もいた。食べる派の児童は「やっぱり食べるべきだ」という思いを強めた。その後、保護者の考えを用いながら、食べることも食べないこともどちらも人間らしい決断であることを確認し合い、互いの立場の思いを交換し合った。食べない派の児童は、アイガモは食べられなくても、他の牛や豚の肉を平気で食べている自分の矛盾さを痛感した。

そして、アイガモは、文化祭で地域の人に呼びかけて他に飼い続けてくれる人を探すか、それで見付からない場合は食べられるかもしれないが、もらってくれる人に譲るということに決めた。食べる派の児童の中には、最後まで食べることを主張し続けた子もいた。しかし、第3時後に児童の思いはこれまで以上に揺らいだことが、授業後のシートから分かる。

資料5 (第3時後のシートから)

今日の話し合いで、私は思いました。食べることは、悪いことではないと思いました。でも、私はアイガモのお肉を「はい」と目に出されたら、絶対に食べられません。だって、せっかく育ててきたアイガモを食べるなんてかわいそうだからです。アイガモを殺さないで育ててくれる人がいればそういう人に飼ってほしいけど、いなかったら食べられても仕方ないけど人にあげるしかないと思います。私は絶対に食べたくありません。
(K子)

私は食べる派でした。でも、今日の話し合いで、どちらともいえない気持ちになりました。確かに泳いでいたアイガモがいなくなって自分の前に肉として出てきたら、さすがに少しひきます。でも、食べたらいいと思っ食べます。食べたくないという気持ちと食べたいという気持ちで、どちらが大きいかというと、食べたいという気持ちです。でも、少しかわいそうに感じてきました。
(W子)

ぼくは、最初は食べたくなかったのだけれど、今日になって食べたくなくなりました。人間は、食べないと生きていけないので食べます。かわいそうですけど、食べます。
(I男)

このI男は、これまでずっとアイガモを食べることを拒んできた児童の一人である。このI男の姉こそが、2年前鶏肉を食べられなくなったという児童である。その姉のこともあって、I男はアイガモを食べたくないと思ってきたと考える。しかし、そのI男が第3時の話し合いで、互いの立場の思いや矛盾していた自分の気持ちに気付くことにより、食べることも大切な選択であることを理解した。このI男の変化に、第3時の話し合いが意味深いものであったことを実感した。

資料6 (第3時の授業を参観した保護者の感想)

アイガモについて、子どもたちが真剣に考えている様子がわかりました。先生方のご意見とは反対になりますが、私は見ている「食べる派」の子どもたちの方がしっかりと意見もち、アイガモの命と向き合っているように感じました。春、稲作を始めるに当たり、アイガモ農法を希望した子どもの数が多かったと聞きました。その時、子どもたちはアイガモをどう考えていたのでしょうか。もしも「かわいい」という理由でアイガモ農法を選んだのであれば、それこそ命について軽んじていたのではないかと思います。今の状況は「かわいいからベツを飼い、飼えないから手放す」ように思えてなりません。私も子どもの頃うさぎが家畜として飼われ、食肉となって食卓に出てきた思い出があります。やっぱりかわいそうで食べることができませんでした。しかし、私たちがバックされて買ってくる肉と同じで、家畜は食べるために飼われていたのです。皆が食べないにせよ、私は精肉処理され肉となった姿は子どもたちに見せるべきだと思います。それこそがアイガモ農法だと思います。低学年の子どもたちにとってもよい勉強だと思います。
(Hさん)

第3時を終えて… アイガモを食べる派 14人 食べない派 34人

4 結果と考察

この研究を通して、命を見つめ食の大切さに気付く子どもを育てる支援として、以下の支援が有効であることがわかった。

(1) 田んぼにかかわれる体制づくり

この実践では、児童が田んぼに出かけアイガモの世話をするという飼育・栽培活動が中心となる。アイガモの行く末を話し合う時に対象とのかかわりの深さによる違いを影響させないために、当番がすぐに回ってくるようにしたこと、田んぼ日記を回させた手立てが有効であった。児童は田んぼ日記を通して、自分が当番になった時だけでなく、田んぼに出かけなかった日の様子も知る事ができた。また、自分が当番の時の田んぼやアイガモの様子を積極的に

皆に伝えようとしていた。そのような姿から「5年生みんなの田んぼなのだ。」という意識が深まったと感じた。

(2) 様々な場面での各自の考えの明確化

初めに農法を決定する際やアイガモの行末について話し合う際などに、各自がどう考え、どうしたいのか、それぞれの立場を明確に記述させてきた。どうしたらいいのかわからないという児童は1人もいなかった。問題にぶつかった場面で一人一人の考えを明確にさせたことで、児童の意識が活動に向かってより明確になり、自分のこととして問題をとらえることができたと考えられる。また、いろいろな考えを交換し合い、その中で自分の思いを確かめたり築き上げたりすることができる話し合い活動が効果的であった。

(3) 地域の指導者、保護者の活用

今年の実践では、2年前より地域の指導者が2人増え、3人で稲作をバックアップしてくれた。1人は前回のアイガモ農法を指導してくれた経験者として、1人は稲作のベテランとして、もう1人は獣医であった経験を生かし、アイガモの専門家として支援してくれた。このような人材が揃ったことは、非常に有り難かった。指導者のおかげで児童は本物の体験ができ、無事に収穫の時期を迎えることができた。また、経験に裏付けられた説得力のある話や分かりやすい説明が、児童の活動する意欲を高めたと考えられる。それは、活動後のシートに指導者から聞いた言葉が多く記述されていたことから分かる。また、保護者を巻き込んだことにより、保護者の活動に対する関心が高まったと考えられる。アイガモがネットの外に何度も脱走してしまったが、その度に近所の保護者が捕獲してくれた。また、田んぼとネットの間隙を埋めるために家から杭を持ち出して打ってくれたりした。教師の知らないところや目の行き届かなかったところで、そっと田んぼやアイガモを守ってくれていたことが有り難かった。また、アイガモの行く末に関しては、48人中40人の保護者から意見を集めることができた。この数からも保護者の関心の高さが伺えた。そして、当然のことながら、2年前より確実に職員の負担は軽減していた。地域の指導者と保護者の協力があったこそ、手間のかかるアイガモ農法も無理なくできたのである。

5 今後の課題

アイガモ農法を始めるにあたり、最後にアイガモをどうするのが、この活動の中で最も重要な問題であると考えていた。2年前の結果にこだわることなく、本年度の児童の思いを大切にしながら、児童とともに決めていこうと考えてきた。しかし、今年の実践を通して、2年前の実践でアイガモを食べた事実が大きく児童に影響していたことを改めて実感した。2年前の実践がなかったら、果たしてアイガモを食べるという選択肢を児童は自ら導き出せたであろうか。現代の子どもたちを取り巻く環境には、身近で育てた家畜を食べる機会はほとんどなくなった。しかし、実際に食べた経験を見聞きしていた児童は、食べることの正当性を理解していた。昔の子どもは、家畜を食べることが当たり前のような環境があって、家畜とペットを割り切って考えられたのであろう。今年の実践では、アイガモを食べないことにしたが、生き物の命をいただいて人間が生きることや食べ物の大切さには十分気付いていたと感じる。どちらにするかという立場は最後まで変わらなかった児童も、一番大切に思っていた「互いの立場の思いを認め合い、自分を振り返ること」ができたと考えられる。食べる派の児童も食べない派の児童も皆、アイガモのことを大切に考えていた。食べない派の児童はアイガモを生き延びさせる道を必死に探そうとしていた。涙を流して訴える児童もいた。アイガモ農法において、アイガモは自分たちが育てた家畜であると同時に稲を育ててくれた生き物でもある。そこにはアイガモを挟んでの相関関係がある。そこに、豚など別個に育てるケースとの違いがある。どちらの立場を選んだ児童も、アイガモへの愛着と同時に稲を育ててくれたアイガモへの感謝があったのだ。ただ、始めから、最後には食べるということが前提となっていたら、どのくらいの児童がアイガモ農法を選んでいただろうか。最後にはアイガモを家畜として食すことを前もって決めておき、アイガモ農法を行うという方法も有効だったかもしれない。

また、地域の指導者にはたくさんの協力をいただいたが、欲を言えば、アイガモ農法を実際にやっている農家の方との接点をつくることのできたら更によかったのではないかと考える。指導者で実際にアイガモ農法を経験している人はいなかったが、分からないことなどを相談すると、一生懸命に調べてくれた。しかし、実際にアイガモ農法をやっている人との接点があれば、直接児童が質問をしに行ったりすることでき、より本物に近い体験が児童自らの力で可能になるのではないかと感じた。

まだ本年度の実践の途中である。これからは、アイガモを通して関心の湧いてきた食物連鎖の頂点に立つ人間としてのモラル、アイガモをつくったように交配して新たに生み出す品種、生命倫理の問題などにも活動の視点を置いて進めていきたい。

〈引用文献〉

- 1) 本間浩之 「食と命 (いのち) を見つめる児童の育成をめざして」『教育実践研究第14集』上越教育大学学校教育総合研究センター2004、203～208pp